〈研究ノート〉

伊藤昌哉と宏池会

――未公開史料を用いて――

小枝義人

要旨　池田勇人の首相政務秘書官、池田が創始した自民党の派閥「宏池会」事務局長、首相・大平正芳のブレーンも務めた政治評論家・伊藤昌哉の死後、筆者は淳夫人から伊藤の遺した大量の未公開史料を譲り受けた。本稿は、その中にあった草創期の宏池会に関する未公開史料を解析・検証したものである。内容は一九六四年一〇月の東京オリンピック後間もなく病気のため首相を辞任する池田の退陣表明文案、後継指名に至る政局シミュレーションと池田亡き後の宏池会の展望が中心である。前者は二〇〇字詰め原稿用紙二枚、後者は二五枚に亘り、いずれもブルーのインクで記されている。本稿が今後の戦後日本政治史研究の一助となれば幸いである。

キーワード：池田勇人、自民党、後継指名、佐藤栄作

はじめに

伊藤昌哉の名前を知る人は今や、そうはいないのではないだろうか。昭和後期から平成初期まで論壇で活躍した政治評論家である。福岡県福岡市に本社を置く「西日本新聞」の政治担当記者を経て、池田勇人の首相政務秘書官となり[1]、一九六四年一一月からは池田が旗揚げした自民党の派閥「宏池会」の事務局長を務めた。池田の死後は、後に首相となる大平正芳のブレーンとして政治活動を支え、政治評論家に転身してからは各種マス・メディアで辛口批評を展開した。

筆者と伊藤との出会いは、中曽根康弘内閣時に遡る。自民党の派閥政治、田中支配全盛の頃だった。田中角栄と福田赳夫による「角福戦争」の内実を中心に、佐藤栄作内閣から中曽根内閣までの権力闘争を、伊藤が大平のブレーンという立場だからこそ知り得た事実を盛り込み、「権力の研究」との副題を附して描いた迫真のドキュメント『実録自民党戦国史』（朝日ソノラマ、一九八二年）がベストセラーとなり大きな話題となった。

筆者は一九七九年、ラジオ関東に入社以来、報道部で政治担当記者として勤務し、一九八三年夏からは、毎週金曜日午後、スタジオに政治家をゲストに招いて、政治評論家の中村慶一郎と語り合う「政局を語る」という三〇分番組のディレクターも務めていた。オン・エアは翌土曜日の早朝である。

筆者は、この番組に『実録自民党戦国史』の著者である伊藤を呼ぼうと、無理を承知で本人に電話し、出演を依頼した。

伊藤は快く引き受け、以来、二ヵ月に一回程度、番組に出て政治解説を展開してくれた。初出演は一九八六年六月

二一日だった。[2] 信仰心のあつい金光教の信者故か、その独特の表現、巧みな比喩がラジオの聴取者の心を掴み、好評を博した。

その後、筆者が栃木新聞社に転職してからも交流は続き、一九九二年春から一九九三年秋までの一年半に亘り、「伊藤昌哉『政局を読む』」と題するコラムを毎月一回、「栃木新聞」に定期連載してもらった。

筆者が伊藤の自宅を訪れてカセットテープを回しながらインタビューし、それをベースに筆者が構成して紙面に掲載した。原稿は当初の手書きから、後半はワープロ出稿に切り替わる時代でもあったので、作業が格段に迅速になったことが、長く掲載できた大きな要因だと思っている。

もちろん、伊藤との遣り取りは、真剣勝負だった。伊藤から、いかにユニークなコメントを引っ張り出すかが、この企画の要諦だったからである。一時間余のインタビューが終わってからの雑談の中でも、伊藤の頭から新しいアイディア、深化した考えが浮かべば、再びテープを回すかメモに記し、校正段階でもキャッチボールが続いた。随分と手間を要したが、「永田町」という難解な世界を、パズルを解くように解析する実に楽しい知的作業であった。

自社五五年体制最後の自民党単独政権である宮澤喜一内閣発足後半年から始まり、自民党の最大派閥である経世会（竹下派）の内部分裂抗争、細川護熙を首班とする八党派による非自民連立政権誕生という戦後日本政治史に残る疾風怒濤の時期である。『自民党戦国史』で権力闘争の本質に切り込んだ伊藤が、平成の政界再編劇でも、その鋭い洞察力を縦横無尽に駆使して論評した定期連載は、読者からも大きな反響を呼んだ。

当時の編集局長・沖村文雄は、伊藤の連載記事の文字ポイントを通常より大きくして掲載、毎月の目玉企画として「売り」にしていたセンスも秀逸だった。否が応でも目立ったのである。

伊藤は筆者にとってジャーナリスト、そして政治学徒としての師匠である。伊藤が鬼籍に入ったのは二〇〇二年一

二月一三日のことだった。死因は虚血性心不全で八五年の生涯だった。それから四年近くが経った二〇〇六年九月、筆者は「伊藤昌哉『政局を読む』」に解説を附し、伊藤に連れ添った淳夫人への筆者によるインタビューを加えた『伊藤昌哉政論』（春風社）を出版し、その際、淳夫人から、コピーを含め、伊藤の遺した大量の未公開史料を譲り受けた。

本稿は、その中にあった草創期の宏池会に関する未公開史料を解析・検証したものである。今後の戦後日本政治史研究の一助となれば幸いである。

一、伊藤の経歴と著作物

最初に伊藤昌哉の経歴と著作物を紹介したい。このうち、経歴については本人が記した履歴書や各種辞令を整理し、時系列で列記している。

経歴

一九一七（大正六）　年　一一月二一日、南満州大石橋に生まれる。[3]

一九三九（昭和一四）年　三月、第一高等学校文科甲類卒業。

一九四二（昭和一七）年　一〇月、東京帝国大学法学部政治学科繰り上げ卒業。同月、西部四二部隊入営。

一九四三（昭和一八）年　一一月、新京陸軍経理学校卒業。

一九四四（昭和一九）年　三月、西部四二部隊主計少尉。

一九四五（昭和二〇）年　八月、西部四二部隊主計中尉。

一九四六（昭和二一）年　三月、中国湖南省長沙において除隊。福岡県福岡市に引揚げ。九月、株式会社西日本新聞社入社。東京支社勤務を命ぜられる。

一九四八（昭和二三）年　一一月、武政淳と結婚。

一九五四（昭和二九）年　一月、西日本新聞社東京支社政治部次長に就任。

一九五六（昭和三一）年　一月、西日本新聞社本社整理部次長に就任。

一九五八（昭和三三）年　三月、西日本新聞社退社。四月、宏池会入職。六月、第二次岸信介内閣発足に伴い、池田勇人国務大臣秘書官に就任。

一九六〇（昭和三五）年　七月、池田内閣発足に伴い、内閣総理大臣政務秘書官に就任。[4]

一九六四（昭和三九）年　一一月、池田内閣総辞職後、宏池会事務局長、新財政研究会事務局長に就任。

一九六六（昭和四一）年　一二月、東急建設常勤顧問に就任。

一九六七（昭和四二）年　五月、東急建設常務取締役に就任。

一九六九（昭和四四）年　一一月、東急建設専務取締役に就任。

一九七一（昭和四六）年　八月、東京急行電鉄顧問、調査役に就任。

一九七五（昭和五〇）年　五月、東急建設監査役に就任。

一九七六（昭和五一）年　一二月、福田赳夫内閣発足に伴い内閣調査員（非常勤）に就任。

一九七八（昭和五三）年　一二月、大平正芳内閣発足に伴いブレーンとして大平を支える。

一九八〇（昭和五五）年　六月、大平死去後、評論活動を開始。

一九八二（昭和五七）年　一二月、東急建設顧問に就任。

一九九七（平成九）　年　三月、東急建設、東京急行電鉄を退社。[5]

二〇〇二（平成一四）年　一二月一三日、午前一〇時三〇分、虚血性心不全のため東京都練馬区内の自宅で死去。享年八五。

著作物（単著）

『池田勇人――その生と死』（至誠堂、一九六六年）、『実録自民党戦国史――権力の研究』（朝日ソノラマ、一九八二年）、『新・自民党戦国史』（朝日ソノラマ、一九八三年）、『日本の政治　昼の意思と夜の意思――ブーちゃんの政治道場対談集』（中央公論社、一九八四年）、『池田勇人とその時代――生と死のドラマ』（朝日新聞社、一九八五年）、『自民党戦国史』上中下巻（朝日新聞社、一九八五年）、『日本宰相列伝㉑』新装版（時事通信社、一九八五年）、『宰相盗り』（ＰＨＰ研究所、一九八六年）、『自民党「孫子」――孫子理論による政治力学の解明』（プレジデント社、一九八六年）、『池田勇人』（時事通信、一九八六年）、『哲学のない政治家が、国を滅ぼす』（致知出版社、一九八九年）、『危機の政治・予見の政治』（ＰＨＰ研究所、一九九三年）

二、宏池会と伊藤メモ

宏池会は東京都港区赤坂一丁目の日本自転車振興会館五階にオフィスがあった。筆者も記者時代に宏池会を数年間担当し、週に何度も足を運んだ場所であり、間取りには記憶がある。所属議員が一同に集まることができる広い会議室と会長室、ソファや椅子が置かれたフロアーがあり、スタッフが常駐していた。

宏池会が発足したのは一九五七年六月のことだった。その起源について宮澤喜一は「長老の益谷秀次、林譲治さんや、前尾繁三郎、大平正芳、黒金泰美さんや私らが参加した。当初は政策を勉強するというより、三々五々集まって情報交換する場だった。一方で池田さんの大蔵省時代の友人の田村敏男（宏池会事務局長）さんを中心に、下村治さんや学者が集って勉強会をしていた。池田政権に備えて政策を準備するという明確な目的があったわけではない。下村さんが日本経済は興隆期に入ると言い始めて、これは重要なテーマなのでみんなで勉強しようということになったのだった」と述懐している。[6] 宏池会は情報交換や勉強会を開催する一種のサロンであった。これが後に多くの宰相を生み出す派閥に成長していくのである。

二〇〇二年一二月、伊藤昌哉が死去して間もなく、淳夫人から譲り受けた史料の中で、最も興味を惹かれたのは、池田死去二日前の一九六五年八月一一日、入院中の池田に手渡そうとして、払い除けられたという伊藤の励ましの自筆の手紙であった。これは拙著『伊藤昌哉政論』に全文を掲載した。

一九六四年九月九日、池田は国立がんセンターに入院し、東京オリンピック閉幕翌日の一〇月二五日に退陣表明する。その際、誰に政権移譲するか、池田が創設した宏池会が、自民党の中で、いかなるポジションを占め、存続していくのかについて伊藤自らがシミュレーションを行った。池田の退陣表明文案は二〇〇字詰め原稿用紙二枚、伊藤の政局展望は二五枚に亘ってブルーのインクで記されている。

池田は入院二ヵ月前の七月に自民党総裁選で三選を果たしたばかりであった。その直後の入院であるから、自民党内が大きく揺れることが予想される。実際の政治展開は、池田死去から一年後に出版された伊藤の著書『池田勇人――その生と死』に記されているが、伊藤の残した史料と比較しながら確認していきたい。勿論、伊藤の予見通りには進まなかったが、その政治分析、人間観察は極めて的確で驚かされる部分が少なくない。アジア初のオリンピックに多

くの国民が酔いしれる中、その裏側では池田の跡目争いが、同時進行で激しく展開されていたことに、変わらざる権力闘争の本質を見る思いである。

三、池田の退陣表明文案

一九六四年九月七日、池田はＩＭＦ（国際通貨基金）東京総会で演説し、その僅か二日後、国立がんセンターに入院する。当時の新聞報道を見ると、「池田さん、笑顔で入院」といった具合で、余り深刻さは感じられない。[7] 池田勇人は一〇月一〇日、東京オリンピックの開会式には入院先から駆けつけている。

池田が正式に退陣表明をしたのは、二週間後の二五日、閉会式翌日のことである。自民党総裁三選を決め、戦後復興の姿を世界に向けて発信した最大の行事を終えた池田は、これからの残り任期二年間を政権総仕上げと考え、高度経済成長の歪みとの批判に応えるべく、人づくりに取り組もうとしていた矢先に病魔に襲われた。喉頭癌である。

総裁選前後から喉の痛みを訴えていた池田は東京大学医学部附属病院での診察の結果、喉頭癌であることが判明した。当時、癌が見つかれば本人には告知しないのが普通で、医師団は病名に苦心惨憺し、記者会見では「前がん症状」と発表している。

伊藤昌哉は二〇日夜、退陣表明文案の執筆に時間を費やす。二一日明け方三時までかかったという。[8] 推敲された文案は以下の通りである。

医師団の綜合診断による外は　何人の意見にも左右されず　私は私自身の信念に基づいて　この際　首相の地

位を辞任すべきであると決意して。内外の情勢から　日本国の首相に許される入院の期間は自ら一定の限度があると考へたからである。

三選以来　私の使命は経済の歪み是正、党の近代化、自主外交の確立外交案件の自主的処理にあると考へ続けて来た。いま私は　私の手によるその実現を断念した。国民各位に相すまぬ気持で一杯である。

私はこの思ひを我党同志諸君に托したい。生まれ胎動する国際情勢の中にあって　同志諸君が常に党の団結を確保維持し、速に事態の捨収(ママ)を図って政局の安定を期し　我党の公約を確実に果たされん事を切望してやまない。

自ら省みて足らざるところの多かりしかった私に　四年有余支援をおしまなかった国民各位に対し心から感謝の意を表する。

伊藤の文案は二二日、池田側近の大平から自民党幹事長の三木武夫に手渡され、党側で一部字句が改められたものを、池田が確認し、正式な退陣表明文となった。(9)

四、池田退陣後の政局展望

一九六四年七月の自民党総裁選の結果は池田勇人二四二票、佐藤栄作一六〇票、藤山愛一郎七二票で、池田は佐藤を八二票差で破ったものの、過半数を僅か四票上回って、辛うじて一回目の投票で三選を勝ち取った。だが、もし決選投票に進んでいれば、佐藤に軍配が上がる可能性もあった。

長期政権に対する飽きから、三選は果たしても、二年後の総裁任期満了まで池田の求心力が保てるのか。所謂「レームダック現象」を危惧、あるいは期待する交錯した空気が自民党を覆っていたのであろう。

そこに飛び込んできたのが、池田の病気である。真っ先に反応したのは直近の総裁選で次点となった佐藤であり、同時に池田を支えた河野一郎、加えて、財界から国政に転じ、外務大臣まで務めた藤山もポスト池田に意欲を持っていた。ポスト池田争いは、三ヵ月前に行われたように公選になるのか、池田の後継指名という形になるのか。いずれにしても、激しい角逐が始まる予感は十分である。

ここから先が池田退陣後の伊藤昌哉の政局展望である。池田の病状を知る最側近として、退陣表明文案作成前後に一気に書き上げ、政治情勢に応じて、多少、書き足したものではないか。内容からして、そう推察できる。その後、伊藤は池田死去までを慌ただしく過ごし、この史料は伊藤の書斎で眠ったまま、四〇年ほど放置されていた。以下、細かく見ていく。

○党内情勢

（1）池田首相の意思表示（辞意）があるまで「動けない」というのが大勢である。（福田赳夫）「動けば四方から叩かれる。演出側近を見守れ」というのが現状であらう。各派は少数の幹部が謀議をこらし連絡員の設置情報網の確立に止まっている（佐藤派は十月二十一日、幹部会を開く予定）

政治家の健康状態は、政治生命をも大きく左右するため、異変があれば周囲は伏せるが、今も昔も、あっという間に噂は広がるものである。永田町では、水面下で池田の後継を巡る駆け引きが始まっていたが、表立って動けば、不

謹慎の謗りを免れない。ここで伊藤は福田赳夫の言葉で「動けない」と引用している。

当時の福田の立場を確認しておきたい。福田は池田の経済運営を批判した急先鋒の一人である。岸（信介）派の福田は池田内閣では当初、自民党政調会長に就任した。福田は大蔵省で池田の後輩だが、池田の国民所得倍増計画を始めとする経済ビジョンには一貫して批判的で、財政均衡、安定成長論者であった。当然ながら、政調会長は一期で更迭され、池田時代は無役であり、岸の実弟である佐藤栄作寄りの立場であった。加えて、多額の現金が飛び交ったとされる先の総裁選や領袖が競う派閥政治に対しても、厳しい態度で臨んでいた。

造語の名人といわれた福田だが、その中でも「昭和元禄」は、最も人口に膾炙されたもので、これは池田の経済政策を批判する言葉であった。一九六四年六月、総裁選直前に福田が公然と池田退陣を要求したことがあった。「所得倍増、高度成長の結果、社会の動きは物質至上主義が全面を覆い、レジャー、バカンス、その日暮らしの無責任、無気力が国民の間に充満し、『元禄調』の世相が日本を支配している」と痛烈なものであった。[10]

故に池田退陣となれば、真っ先に福田の言動には注目が集まる。七月の総裁選に引き続いて福田は岸の実弟・佐藤を応援するのは目に見えている。ライバル側情報である福田発言を伊藤が重視するのは当然であろう。

（2）七月に於る総裁公選の戦略について教訓を思い出し公選当時の勢力を確保することに専念しているが（佐藤派はすでに大野派と接触し（倉石氏らが川野芳満氏等三氏と）同派の動揺分子に誘いをかけている。）十月二十五日以降は一せいに行動に出るであらう。

自民党は、しばしば「派閥連合体」と呼ばれることがある。派閥が台頭し始めたのは初代総裁・鳩山一郎退陣後の

一九五六年一二月の総裁選の時であった。この頃の派閥は「七個師団三連隊」と呼ばれていた。石橋（湛山）派、河野（一郎）派、岸（信介）派、石井（光次郎）派、大野（伴睦）派、吉田（茂）派、松村（謙三）・三木（武夫）派が師団規模、芦田均、北村徳太郎、大麻唯男グループが連隊クラスと見られていた。その後、吉田派は池田、佐藤派に分かれ、石井、大野、岸、河野、石橋、三木・松村（謙三）派とともに八個師団に収束する。

岸退陣後、岸派から藤山愛一郎が脱退し藤山派を結成、池田内閣期には岸派が解散し、福田派と川島（正次郎）派に分裂している。池田退陣前後は中間派と呼ばれる中小グループも多く、群雄割拠時代であった。

伊藤が記しているのは、池田を支えた大野派の倉石忠雄と川野芳満たちが佐藤支持を要請されているという水面下の切り崩しの動きであろう。勝ち馬に乗り、それぞれの派閥が閣僚・党役員ポストを獲得する機会は、総裁選で貸しを作る時をおいて他にはないからである。

（3）だから　この段階においては各派の性向（幹部の手口と人間性）を徹底的に追及して（ママ）　政局の帰趨を予見し「極限値」を発見するという作業にならざるを得ない。この作業で一応の目安をさだめた上　十月二十五日以降　起きるであらう現実の動きに合はせて随時、対策を立てるというのが正しいことにならう。

ポスト池田を巡る争いは、退陣表明した途端、水面下の動きが一気に浮上すると伊藤は記している。「各派の性向（幹部の手口と人間性）を徹底的に追及し」とあるが、文面を眺めている限り、伊藤が最も警戒しているのは、川島正次郎であろうと推察できる。「政界一寸先は闇」の名言で知られる川島は、長い政治活動の中で、自らは主役になることなく、キーマンとして動き、どんでん返しの筋書きを導き出すことを繰り返してきたからである。

（4）各派の動向は総裁候補をもつもの（第一グループ）と然らざるもの（第二グループ）とによって動きが異るはずである。

第一グループ　佐藤（岸）　河野　藤山　川島　三木

第二グループ　石井　大野　池田

池田内閣を支えた勢力は、発足当初と政権後半では、かなり変異する。「池田内閣ははじめ、自民党内の官僚派対党人派の図式の中で、岸・池田・佐藤の官僚派をまとめてできた内閣であった。しかし、佐藤氏が『次ぎ』を急いで岸、福田氏らとともに池田内閣批判を強めると、大野伴睦、河野一郎氏ら党人派はこれに対抗して池田寄りに変わり、池田内閣をめぐる当初の図式は逆転」していた。[11] ここで総裁候補を持たない第二グループとして伊藤が池田派以外に挙げているのが石井派と大野派である。過去二回、総裁選に敗れた石井光次郎は最早、総裁ポストへの意欲を失い衆議院議長の道を模索する。大野伴睦は池田三選直前に逝去し、やがて大野派は雲散霧消していく。

（5）第二グループに共通な意識は総裁候補をもたないという立場からキャスティング・ボートを握って主流派に参加し　高く売りつけよう（大野派の如し）という考へ方で　最後まで去就を明らかにしないかもしれない。（若し早くから明らかにしようという動きをみせるなら　それは第一グループからの働きかけがあったのであり、その派に関するかぎり「勝負は終っていた」ということになる。池田派の去就は極めて重要で各派は一せいにその動向を注目するであらう。前尾　大平　鈴木　周東氏等の核を中心に一体となった体制をまさ（ママ）なければならない。幹部一任（最悪の場合池田一任）をとりつけて徐々にタガをはめ　不純分子の動きを拘

束すべきである。

石井派は派としての動きをみせないまゝに終るかもしれないが　形の上では七月選挙の時と全く同様の態度をとるであらう。

伊藤は池田による後継指名という形になっても、池田、川島正次郎、三木武夫、大野伴睦の四人が結束すれば、佐藤栄作を牽制する強力な勢力になり得ると考え、池田に進言し、池田の盟友で宏池会の次期会長となるであろう前尾繁三郎にも、そのことを伝えている。「前尾　大平　鈴木　周東氏等の核を中心に一体となった体制をまさなければならない」と記したのは、まずは池田派の結束を促しているのである。

ただ、前尾という人物は大蔵官僚上がりの秀才で、文化人的側面も持つが、政治家としてはトップになる器量はなかったようである。ポスト池田政局でも「前尾は動き出したが、非常にのんびりしていて、なにを考え、なにをやっているかさっぱりわからない。私はじりじりしてくる」と伊藤は嘆息している。[12]

（6）第一グループのうち最も態度が明白なのは佐藤派である。この派は佐藤氏自身を含めて自らの処え政権が来ることを95％信じている。池田派は益谷グループ　大平グループの協力によって自派に協力すると考えているのであらう。吉田大磯が最後のキメ手になるともふんでいる。この線がのびて来れば「話合」に応じてもよいし　河野の臨時首相代理は認めてもよいと考へているようである。「河野派との激突をさける」という考へ方があることは注意を要する。この派は最後まで首相になり得るチャンスを失うまいとねばるであらう。話合いの線で破れゝば公選を主張するでらう。したがって議員総会方式で総裁を決定することには、佐藤氏

が総裁になる場合以外は反対するとみなければならない。（公選のケースはあり得るとみる）

佐藤栄作は、数の勝負でも話し合いでも、党内で優位な立場を維持しようと考えており、（1）池田との共通の師・吉田茂への協力要請に向けた準備していること、（2）池田派内の長老・益谷や若手の大平正芳、宮澤喜一たちにも、河野一郎ではなく自分を支持するよう働きかけていると伊藤は認識している。佐藤は河野を外堀から埋めていき、池田が佐藤を指名せざるを得なくなる状況を作り出そうとしているのである。

伊藤の見立ても佐藤になるであろうと予見しているが、その場合、飽くまでも池田が主導権を持って指名できる政治状況を作ることが前提でなければならないと考えている。しかし、そうはなっていないことに呻吟しているようである。

（7）河野派の去就も総理総裁を狙う立場にある十月二十五日の医師側診断で「一、二ヶ月の治療が必要」と出た時は河野の処へ臨時首相代理が廻ってくると判断している。河野周辺が臨時首相代理を獲得することで佐藤氏より一歩先んずることになるとみるのは当然で若し首相がその措置をとらないとすれば必ず池田派に反撥の態度に出るであらう。（十月二十五日の決定はこの措置をめぐって党首脳間に意見の喰違いが出るかもしれない。）河野派はあまり友党をもっていないので党の大勢を形成する力に欠けている（池田派の構想をマルのみした場合は別である）が党の大勢を決する寸前にこれを破壊する作用をする可能性がある。（河野一郎が突然佐藤栄作と結ぶが如き場合）

首相臨時代理は重い立場である。首相が何らかの理由で不在の場合、代わって職務を担う。この場合、副総理級の河野一郎が、病気静養の池田に代わって臨時代理になれば、最有力の後継候補と見做されてしまうことを佐藤栄作陣営が恐れ、池田にも強い反発を見せると予見している。池田は、臨時代理を置かずに入院し、後に退陣を表明、後継指名争いに向かうのだが、それは佐藤優勢、河野劣勢を裏づけていくことになる。

実際、大野伴睦の死去後、党人派の河野は党内で孤立しつつあった。同じ党人派仲間とは言え、川島正次郎が河野指名に動くとは思えない空気が党内には存在していた。河野も、自分が不利な立場であったことは承知しており、池田の逆転指名に期待していたのは、池田の政権運営や総裁三選に誰よりも尽力したという自負があったからであろう。

とりわけ三選を果たした三ヵ月前の総裁選では政治資金の捻出は抜きん出ていた。河野の盟友で映画会社の大映社長・永田雅一は「兵庫県芦屋の自宅を処分して二億円の軍資金を作り、池田に届けた。この時池田が『本当に助かる』と礼をいうと、永田は『このカネはオレのカネだが、河野のために出すんだよ、河野をよろしく頼む』といった」という。[13]

（8）藤山派は最も簡単明瞭である。反佐藤、反河野の線で大勢が決するとみれば容易にこれに乗るであらう。（中道派の結成は藤山自身の主張である。）若しこの線が確立しなければ　公選を主張し　佐藤　河野　何れとも争って自己の立場を明らかにするであらう。

（9）川島派は常に主流派となる作戦に出るであらう。副総裁の地位保持を最低限度とし、党内操縦しやすい総裁を選ぶであらう。（佐藤河野よりは藤山を選ぶ）川島暫定総裁説すら取引きの道具に使うはづである。

少数派閥である藤山派の藤山愛一郎が選ばれることは、党内力学上、あり得なかったのだろう。藤山は岸信介の勧めで財界人から国政に転じたが、政治資金に私財を全て注ぎ込んだ「井戸塀政治家」であった。三ヵ月前の総裁選にも立候補したが池田、佐藤栄作の後塵を大きく拝し、二桁の最下位で落選した。

他方、川島正次郎は池田三選に協力したことから病死した大野伴睦の後任として自民党副総裁に就任している。伊藤はそんな川島のこの先の言動を正確に予見している。「副総裁の地位保持」に加え「党内操縦しやすい総裁を選ぶであらう」とは、同じ党人派の河野一郎より、池田と同じく官僚派の佐藤栄作という選択に党内の大勢を持っていくという意味である。

伊藤の見立て通り、川島は佐藤指名の功績を認められ、佐藤内閣発足後も、そのまま自民党副総裁に任命される。佐藤内閣下では一時期を除いて副総裁の地位を維持し、一九七〇年一一月、佐藤四選直後に、現職のまま持病の気管支喘息で急逝した。ナンバー2の生き様を貫いた政治家人生であった。

ただ、川島が佐藤に四選を勧めたのには理由がある。佐藤が三選で退陣すれば、官僚派の福田赳夫が次期首相になる可能性が高かったからである。川島は大蔵官僚出身で岸信介の寵愛を受けている福田を快く思っていなかった。そこには政治家の嫉妬が存在しており、だからこそ、岸が派閥解散を表明した際、福田派と川島派に分裂したのである。

（10）三木は公選になれば立候補しなければならない立場にある。しかし彼は七月公選で反佐藤に徹した。河野とむすんでも佐藤政権の樹立に反対する。三木は自分の健康を知っているふしがある。池田首相が三木を指名しない場合はまとめ役に終始するかもしれない。

三木武夫は党内に盤石な政治基盤を持たず、常に少数派ながら正論を言い続け、政局の鍵を握る手法を取ってきた。ポスト池田については、心情的には同じ党人派の河野一郎と協力し、佐藤栄作を阻止する気持ちを持っていると、伊藤は推測している。

その頃の三木は、胃潰瘍と胆石を患って入院し、胃と嚢胞の手術を受けていた。体力的にも精神的にも自らが立候補する状態ではなかったため、調整役として存在感を示す必要があった。伊藤はそのことを「まとめ役に終始」と表現しているのであろう。佐藤内閣発足後も、三木は幹事長に留任し、さらに通産大臣、外務大臣といった要職を歴任して、ポスト佐藤の有力候補として台頭してくる。

（11）以上のような判断から後継総裁として最後まで争うのは佐藤　藤山　河野　の三人で　川島と三木は話合いによるまとめの線を出す（福田赳夫）とみてよいであらう。以上の三人がどうしても頑張るとなると公選はさけられないという見透しが出てくる。

ここに記した通りの展開となる。三人の立候補表明、幹事長、副総裁による調整、それに基づく池田の後継指名となり、三人が公選を主張することはなかった。池田の病気退陣は決まっていた。数の上では佐藤栄作は優位であり、財界の意向も佐藤であった。

佐藤陣営は和戦両様で、比較的余裕があったが、河野一郎は党内に支持勢力は少なく、池田の指名に期待するしかなかった。藤山愛一郎は二人に比べれば、力不足は否めなかった。三ヵ月前に熾烈な争いをしたばかりである。後継指名で、速やかな政権移譲を実現する。これが党内世論の大勢であった。

（12）各派の勢力結集が結局後継総裁を決定するという原則にかわりはない。現在の池田首相がこれによって三選されたのであるから　今度の総裁もこれによって決まるのは当然である。そこで池田　河野　川島　三木　大野　の五派会談がどの様なな（ま）とまりをみせるかゞ出発点となる。池田　三木の連繋が確立し　これに大野派が乗れば体制は決するのではなからうか。大野派の代りに川島派でもよいがこれには危険がともなう。

一八世紀から一九世紀のフランスの政治家で、常に権力中枢に居続けたジョセフ・フーシェに例え、評論家・草柳大蔵は川島正次郎を「江戸前フーシェ」と命名した。「大野派の代りに川島派でもよいがこれには危険がともなう」という伊藤のコメントは、常に主流派に身を置く川島の老獪さには、裏切りと紙一重の危うさがあるというものである。

（13）一方　川島　大野　河野　藤山の党人四派会談がある。政局の表面ではこの四派会談と（12）項の五派会談が重なり合へば衆院段階での大勢は決したことになる。つまり反佐藤戦線の確立が池田政権の後継者を決定することになる。（藤山川島河野の三者の話合いが最大の課題）

（14）藤山は四者会談には出ているが五派会談には出ていない。池田派と三木派は五派会談には出ているが四派会談には出ていない。したがって藤山と池田派三木派のパイプがよほどしっかりしていないと形の上で池田派がリードしていても川島や河野にしてやられる可能性がある。

「藤山川島河野の三者の話合いが最大の課題」と伊藤は記しているが、そもそも川島正次郎は藤山愛一郎、河野一郎を後継に指名させるつもりはなかった。それで党内が円満にまとまるとは考えていなかったからである。多数派を握っ

ているのは佐藤栄作であると見ていた。佐藤、河野、藤山は当事者だけに、自らを第三者的には扱えない。そうした心理も読み取り、彼らと話し合いながら流れを作っていく。まず少数派の藤山が圏外に去り、佐藤と河野の対峙形を作る。そんなシナリオを描いていた。

（15）池田派と三木派の連繋はいや応なしに最も強固なものとならざるを得ない。この二つの派の周辺に川島　藤山　河野　大野の四派をひきつける工作が第一の問題となる。四派のうち藤山派は池田首相の意中が藤山氏であるとすれば当然乗らざるを得ない。ついで大野派の大勢がきまり、川島派がついてくるということになるかもしれない。唯　佐藤、河野が連繋し　川島がキャスティング・ボートを握るとやっかいになる。

伊藤は周到に、それぞれの派閥の離合集散、合従連衡を予測しながら、政局の見取り図を描いていくが、最後は公選ではなく、池田の後継指名という形に落ち着く。これは三木武夫の発案であった。

日本と同じく議院内閣制のイギリスでは前年の一九六三年秋、首相である保守党党首・マクミランが政治スキャンダルにより支持率が急降下、加えて前立腺肥大で入院したため、辞意を表明した。その際、女王・エリザベス2世がマクミランを見舞い、後任の意向を聞いたところ、ヒュームを指名したため、保守党は党首選を行わず、ヒュームが首相となったという事例があった。

ほぼ同じ時期、一九六三年一一月にはアメリカ大統領・ケネディが暗殺されたが、憲法に従い、副大統領のジョンソンが後継大統領に就任している。池田と同時期に大国を率いた二人のリーダーが任期途中で退陣するという結末まで同じという形になったのも、歴史の綾であろうか。

五、池田後継指名の場合のシミュレーション

一方、伊藤昌哉は仮に池田勇人による後継指名という形になった場合、どうなるかというシミュレーションもしている。以下の通りである。

○池田首相の指名権

（1） 首相は最後まで後継者の指名をいやがるであらう。首相の指名は行えたとしてもそれは実体が出来あがったものを形式的に指名するという形になるかもしれない。したがって 指名によって実体が出来上るとは見ない方がよいだらう。指名が行なはれたとしても かなり時間がかゝり 十一月になってからであらう。指名は単数でなく 複数となり「このうち誰れがなっても支援をおしまない」という形になるかもしれない。或は「公選によって決めよ」という形になるかもしれない。これらは何れも実勢力結集に時間がかゝった時或はそれに失敗した時で最悪のケースであらう。

伊藤が指摘するように、病気入院中の池田は、全くと言っていいほど影響力を持っていなかった。指名までの根回しは幹事長の三木武夫と副総裁の川島正次郎の主導となる。彼らは手を挙げた佐藤栄作、河野一郎、藤山愛一郎に加え、党内の実力者の間を行き来した。佐藤優勢という状況で、河野は伊藤に面会し、自らの思いを池田に伝えようと試みた。河野も必死だった。

一九六四年一一月三日、伊藤は河野に呼び出され、赤坂で会った。「池田総理が引退するのなら、そのとき自分は是非総裁に立候補したいと思っていた。（中略）党の実情はまあ、佐藤が四、河野が三、藤山が一というところだろう。河野は二かもしれない。池田派の支持で大勢は決する」と語る河野に、伊藤は「河野氏の意のあるところは、総理にとりつぐ。このことは言いっぱなし、聞きっぱなしにして、会談はなかったことにしていただきたい。そうでなければ、池田の勇断が勇断でなくなりますから」とかわしている。[14] 翌日、伊藤が池田に報告をすると、池田から「この話は前尾にだけつたえておけ」と指示される。[15]

翌年七月、河野は急逝する三日前、自派の中曽根康弘、桜内義雄、山中貞則、稲葉修を呼んで、夕食を共にした。その時の様子について稲葉は「『党に流されるな』『損得で動いてはいかん』『正を履んで運を天に任せよ』との教訓を受けたが、その席で、『ああ、俺はよく働いたなあ…』と感慨深げに言われた言葉を忘れ得ない」と述懐している。[16] 指名されなかった河野の落胆と悔しさが、三つの教訓に表れているようである。

○時間的な限界

（1） 次期政権工作は池田政権の維持よりむずかしいかもしれない。だから 長い時間かかるとみるべきであろう。臨時国会は当然首班指名国会にならざるを得ない。来年度予算は次期首班が決めるのが正しいからどんなにみても十一月一杯には首班指名が終っていなければならない。国際情勢が変動していること、問題が山積していること、等で世論（特に新聞）は急速な政変劇を要求するであらう。そこでこれを阻害するような態度に出る政治家はマイナスを負う結果になり世論の圧力から十一月中旬には総裁が決り首班が決ることになる可能性がある。

（2）　この場合（首班指名の臨時国会で補正予算その他の案件をこなすことになる）臨時国会を十一月下旬とみて十一月中旬には党内の大勢がきまっていなければならない。このメドは　党執行部の総裁公選、両院議員総会）の期日によって決定される。七月公選の場合は六月二十六日の国会閉幕　七月十日の公選であった。（約二週間である）今度も十一月十四日までには何とかおさまると見てよいだらう。　十一月に入って二週間の時間がある。　十一月に入るまで（十月二十五日から）六日あるのでこの間に「段どり」の決定をすればよい。

○今後の段どり

（1）　政局のスタートは勿論十月二十五日（日）となる。久留院長の病状発表（午前十一時）の間に或はそれより少し早目に比企総長が首相に報告しそれを受けて　十一時すぎには官房長官　三木幹事長　大平副幹事長（前尾氏ら）を首相が呼んで置かねばならない。

首相がこゝで辞意を表明し　ひきつゞき　河野一郎氏と川島正次郎を呼ぶ。（この際　河野一郎氏に臨時首相代理を命ずるかどうかは考えておく必要あり）　首相の談話を発表する。（黒金氏か宮沢氏より財界人のお世話になった少数の人々に電話で辞意表明を発表前に連絡すること）

（2）　十月二十五日中に役員会議を開き　辞意表明の取りあつかい　緊急総務会の招集等の段どりをきめる。恐らく二十六日の総務会となる。これと平行して党長老会議　実力者会談等を予定する。藤山氏が二十七日頃帰国するから　これを待ってくれという要望が出るであらう。実質的な党機関の動きは二十七日以降となる。

（3）十月二十六日の緊急総務会で　池田首相の辞意を受けないという動きが出てくるかもしれない。（河野氏が臨時首相代理になっておればこの動きはないであらう）普通の両院議員総会は議員が散っているので、十月二十八日か二十九日頃になるだらう。こゝで　両院議員総会方式で総裁を決定し　一月党大会で追認するという方式がきめられゝば一番良い。

（4）十一月七日以前に党大会に代るべき両院議員総会が開けるのであれば　話合い方式で後継者を決定出来ることになる。十月一杯は後継者選出の方式をめぐって各派に動きが激しくなり　実質上　これが公選運動となる。

（5）一番良い方法は首班指名の為の臨時国会を十一月中旬にあらかじめ開く予定にし（例えば十一月十日）その二、三日前に党大会に代るべき両院議員総会の日どりを決定してしまうことかもしれない。

（6）要するに十月一杯は段どりの決定（党機関）これと平行して各派の動きが激しくなり、十一月一日から七日までの間に後継者をつくりあげる　というのが大体の目安となると考へてよいであらう。

伊藤は首相政務秘書官として、自民党総裁選、国政選挙、人事、国会、外遊と様々な業務を担ってきただけに、国会歳時記が頭の中で整理されていた。常に逆算しながら作成するのが、政治日程の鉄則である。

実際は、一〇月二五日に池田が退陣表明をした際、公選に依らない池田による後継指名方式になることが決まり、

指名期日は二週間後の一一月九日とし、半月の攻防が行われた。自民党では過去、石橋湛山が総裁選で勝利し首相となるも、病に倒れ六五日で退陣した前例があった。この時、後継には総裁選で石橋に敗れ、外務大臣として閣内にいた岸信介が就いた。

岸は誕生したばかりの石橋内閣のメンバーを替えれば無用の混乱を招くとして、官房長官以外は、そのままの居抜きで岸内閣をスタートさせている。佐藤内閣も、四ヵ月前に発足したばかりの第三次池田改造内閣の閣僚を、官房長官のみ鈴木善幸から橋本登美三郎に替えただけの居抜きで始動させた。

病気退陣という変則状況で、新政権をできるだけ円滑に発足させようとする自民党の知恵が備わってきているのであろう。伊藤は想定外の事態に備え、様々な日程を考えていたが、川島や三木の党内調整を経て、円満に佐藤に決まっていった。

一方、高度経済成長下では、大口政治献金の出処であった財界の意見も無視できなかった。「今後の段どり（1）」に「財界人のお世話になった少数の人々」との記述があるが、当時は政財官トライアングルが強固な時代であり、財界では池田後継は吉田茂の同門である佐藤が最も適任と言われていた。

財界非主流出身の藤山は勿論、財界異端の大映社長・永田雅一や北海道炭礦汽船オーナー・萩原吉太郎のような人物と関わりが深い河野は歓迎されていなかったことも、池田の指名に大きな影響を与えているのであろう。

おわりに

「伝統や系譜に安住していては宏池会政権は生まれない。宏池会の指導者には、保守本流政権を担う自覚と責任が必

要である」とは、宏池会の中核メンバーで自民党幹事長を務めた田中六助の言葉である。[17] 宏池会の弱点を正確に指摘している。政党に栄枯盛衰があるように、派閥も同じような宿命を負っている。大平正芳は派閥領袖として池田勇人の死後から一四年目にして、ようやく宏池会政権を作った。

大平の急死後、鈴木善幸が続けて二年、宏池会政権を担う。宮澤喜一は鈴木善幸退陣の九年後に宏池会政権を率いた。池田、大平、鈴木、宮澤と三〇年間で四つの政権樹立に成功したのであるから、まさに名門派閥と言えよう。

党内を見渡せば、一九七〇年代半ばから二〇世紀いっぱいは、田中角栄・大平系派閥が主流派であり、協力しながら多くの内閣を作ってきた。福田・三木派系派閥は批判勢力でいることが長かったが、二一世紀に入ると、福田系統である森喜朗、小泉純一郎、安倍晋三、福田康夫と長く反主流派にいた政治家が、次々にトップに躍り出て清和政策研究会の時代が到来した。宏池会は宮澤から岸田文雄が首相に就くまで、三〇年近い空白の年月を要したことになる。

前尾繁三郎と大平の対立後、宏池会では宮澤と田中六助、加藤紘一と河野洋平の確執が続く。加藤が会長に就いた際、河野は仲間を連れて派閥を離脱し、宏池会は分裂する。河野引退後は麻生が派閥を引き継ぎ、今日の麻生派となっている。

さらに加藤時代、森内閣の倒閣を目指したいわゆる「加藤の乱」で、宏池会は加藤グループと堀内（光雄）グループに再分裂する。加藤グループは加藤引退後に谷垣（禎一）グループに、宏池会は堀内派を経て古賀（誠）派となり、今は岸田派となっている。しばしば囁かれるのは、三分裂した宏池会が大同団結する「大宏池会構想」であるが、分裂して二〇年余り、いずれの派閥も独自の領袖と歴史を経て、当時を知らない所属議員の方が多くなった今、一つの鞘に収まることは困難と言わざるを得ない。

伊藤自身は一九七八年末に大平のブレーンとして大平内閣誕生に尽力するが、やがて宏池会との関わりも薄くなり、

その時々の政治情勢を憂いながら在野から政治評論を続けた。死ぬ間際、伊藤は淳夫人に「おれも日本経済とおんなじだ（中略）おれもついに自力で起き上がれなくなった」と漏らしたという。[18] 最後まで政治評論家を貫いたのであった。

注

（1）伊藤と同じくジャーナリストから首相の秘書官に転じた代表的人物としては吉田茂内閣の天野公義（共同通信社）、鳩山一郎内閣の若宮小太郎（朝日新聞社）、岸信介内閣の安倍晋太郎（毎日新聞社）、佐藤栄作内閣の楠田實（サンケイ新聞社）、三木武夫内閣の中村慶一郎（読売新聞社）が挙げられる。彼らを登用する理由は首相を政策面でサポートするだけではなく、報道界に身を置いていただけあって、演説原稿の草稿作り、広報宣伝、情報収集に長けているためである（塩田潮『大いなる影法師――代議士秘書の野望と挫折』（文藝春秋、一九八九年）、八七～八八頁）。

（2）ラジオ日本編『「政局を語る」出演者一覧――一九八二年一一月～一九八七年一月』（ラジオ日本、一九八七年）、六頁。当時、出演していた政治評論家としては伊藤以外に三宅久之や和田春生、さらに読売新聞社取締役論説委員長だった渡邉恒雄が加わることもあった。

（3）当時の本籍地は福岡県福岡市出来町である（「履歴書」（一九五八年六月□日＝□は空白）、伊藤淳所蔵）。

（4）池田の首相在任中、事務秘書官は浅沼清太郎（警察庁）、国島文彦（同）、小川徳助（外務省）、黒田瑞夫（同）、人見宏（同）、中林恭男（大蔵省）、楢崎泰昌（同）、吉田正春（総理府）が務めた。

（5）淳夫人から届いた書簡によると、運転手であった高沢和夫の定年退職に伴い、伊藤も退社し、この時、「アシがなくなるのを失脚と謂ふ」と洩らしたという（「伊藤淳発小枝義人様宛書簡」（二〇〇六年二月一日）、筆者所蔵）。

（6）「日本経済新聞」二〇〇六年四月一二日朝刊。

（7）「朝日新聞」一九六四年九月一〇日朝刊。

（8）伊藤昌哉『池田勇人――その生と死』（至誠堂、一九六六年）、二五七頁。

（9）同右書、二五八頁。
（10）福田赳夫『回顧九十年』（一九九五年、岩波書店）、一四六頁。
（11）石川真澄『人物戦後政治――私の出会った政治家たち』（岩波書店、一九九七年）、五六頁。
（12）伊藤昌哉、前掲書、二六〇～二六一頁。
（13）三宅久之『三宅久之の書けなかった特ダネ――昭和～平成政治、25の真実』（青春出版社、二〇一〇年）、五七頁。
（14）伊藤昌哉、前掲書、二六二頁。
（15）同右書、二六二～二六三頁。
（16）稲葉修『稲葉修回想録』（新潟日報事業社出版部、一九八九年）、九八～一〇〇頁。
（17）田中六助『保守本流の直言』（中央公論社、一九八五年）、一三二頁。
（18）小枝義人『伊藤昌哉政論』（春風社、二〇〇六年）、二頁。

（原稿受付　二〇二二年一〇月一八日）